横截五悪趣章（二帖第四通）

それ　弥陀如来の超世の本願と申すは、末代濁世の造悪不善の・われらごときの凡夫のために・おこしたまえる無上の誓願なるがゆえなり、しかればこれをなにとように心をもち・なにとように弥陀を信じて、かの浄土へは往生すべきやらん・さらにその分別なし、くわしくこれをおしえたまうべし、

答えていわく・末代今の時の衆生は、ただ一すじに弥陀如来をたのみたてまつりて・余の仏菩薩等をもならべて信ぜねども、一心一向に弥陀一仏に帰命する衆生をば、いかに罪ふかくとも・仏の大慈大悲をもってすくわんと誓いたまいて、大光明を放ちて・その光明のうちにおさめとりましますゆえに、このこころを経

には、　光明遍照十方世界・念仏衆生摂取不捨と説きたまえり、されば、　五道六道といえる悪趣にすでにおもむくべきみちを、弥陀如来の願力の不思議として・これをふさぎたまうなり、このいわれをまた経には、　横截五悪趣・悪趣自然閉と説かれたり、かるがゆえに如来の誓願を信じて・一念の疑心なきときは、いかに地獄へおちんとおもうとも・弥陀如来の摂取の光明におさめとられまいらせたらん身は、わがはからいにて地獄へもおちずして・極楽にまいるべき身なるがゆえなり、かようの道理なるときは・昼夜朝暮は・如来大悲の御恩を雨山にこうむりたるわれらなれば、ただ口につねに称名をとなえて・かの仏恩を報謝のために・念仏を申すべきばかりなり、これすなわち・真実信心をえたる・すがたといえるはこれなり、

あなかしこ　　あなかしこ

（不読）

文明六年、二月十五日の夜、大聖世尊
入滅の昔をおもいいでて、灯の下に
おいて老眼を拭い筆を染めおわりぬ

満六十　御判

横截五悪趣章の大意

阿弥陀如来の本願が世に超えすぐれているというのは、よごれ
きった末法の世で、迷いの罪をつくり続ける私たちを救うために

おこされた、この上なくすぐれた誓願であるからです。

それでは、どのようにこの本願を心得、どのように阿弥陀如来を信じて浄土に往生するのでしょうか。このことをくわしく述べましょう。末法の世に生まれた今の人々は、他の神や仏をたのみとせず、ただひたすら阿弥陀如来に帰命すれば、どれほど罪が深くとも、み仏は大慈悲をもって、光明の中におさめとってくださいます。このことを『観経』には、「光明遍照十方世界　念仏衆生摂取不捨」と説かれています。また、如来の本願の不可思議なはたらきによって、迷いの世界への道をふさいでくださいます。それを『大経』には、「横截五悪趣悪趣自然閉」と説かれています。如来の本願を信じて少しも疑いの心がないならば、たとえ地獄へおちる身であると思っていても、阿弥陀如来の光明におさめとら

れたものは、地獄におちず極楽に往生する身となるのです。

このように、如来の大慈悲のご恩を常におおいにうけている身ですから、いつも念仏して仏恩に報じなければなりません。これが真実信心を得たすがたです。